

令和元年6月12日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03794

研究課題名(和文) 学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材・カリキュラムの開発と検証

研究課題名(英文) Development and analysis of new Learning Materials and Curriculum that Combine Learning Processes with the History of Japanese Writing System

研究代表者

鈴木 恵 (SUZUKI, Megumu)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：60163010

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語の歴史の変遷を背景とした「国語の特質」に着目し、日本語独自の思考様式(ものの見方・考え方)の解明を通じて、学習者の思考様式の変容に迫る古典学習材とカリキュラムの開発を行った。具体的には、古典の諸本・同文説話の比較を通して「話し言葉と書き言葉」「漢文的文脈と和文的文脈」等、文章内容・目的・共有の場によって異なる姿を見せる言語の姿について学ぶための教材開発と検証授業を行った。このことを通じて、学習者が自らの言語活動について、それを支える背景とともに自覚的に捉え直すことを可能にする古典教育の可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本語話者にとって、その自明性を問うことが難しい思考のレベルにおいて学習者を縛っている「国語の特質」を明らかにしようとするものである。この「国語の特質」を日本語の歴史の変遷の中に見出すことで古典を教材化するための調査研究を行った。こうした教材による学習を通して、学習者は自らの言語活動についても自覚的に捉え直すこととなる。また、自分自身が読み・書くこと、考えることに影響を与え、また変容させうる可能性が古典の中にあることを知る古典学習は、「読み・書く」言語活動における思考(ものの見方・考え方)の深化を促す学習の可能性を開く。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop new Japanese teaching materials using classical literature. In this study, we emphasized the historical transition of the Japanese writing system. That is the fact that different styles of writing systems have existed simultaneously throughout each era. We examined different texts of the same source, and clarified differences in thinking style based on the following viewpoints. (1 spoken language and writing language, (2 Chinese writing style `kanbun-kundokubun` and Japanese writing style `wabun`. Based on the results, we developed learning materials and conducted verification classes.

研究分野：国語学、国語教育学

キーワード：教育学 国語教育 日本語学 日本語書記史 古典教材開発 国語の特質 思考様式 言語文化共同体

1. 研究開始当初の背景

従来「言語事項」とされていた漢字や文法に関わる教育内容は、現行(2008年告示)の国語科学学習指導要領において「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕」に位置付くこととなった。しかし、「伝統的な言語文化」とセットとなった以後も両者は直接的には関連付くことなく、「国語の特質」の研究は、諸外国の言語を対象とした言語学の理論を中心に追究される現状にある。加えて日本語自体を対象とする日本語学の知見でさえも、その多くが共時的記述に基づく現代日本語の特質を描いており、歴史的変遷を背景とした現代の言葉の問題という観点では考慮されてこなかった。そこで、本研究では、日本語の特質の一つである、歴史的背景を伴う書記の複層性や、それに密接に関連する学習者の思考様式(日本語話者特有の思考様式)を解明し、それに基づく学習材とカリキュラムの開発及び検証を試みる。

2. 研究の目的

本研究は、学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材・カリキュラムの開発と検証を目的とする。特に、日本語の歴史的変遷を背景とした「国語の特質」を解明し、それに基づいた開発を目指す点に本研究の特色がある。具体的には、日本語に特有の「思考様式」に着目し、国語教育学で研究・実践してきた思考様式の解明、及び日本語話者としての学習者の思考様式の解明、日本語学(特に日本語書記史)から見た日本語の思考様式の解明、日本語独自の思考様式の解明、「書くこと」の教育のための学習材・カリキュラム開発と検証、を中心とした研究を行う。

3. 研究の方法

本研究では、日本語独自の思考様式を解明し、それに基づく「書くこと」の教育の学習材の開発とカリキュラムの策定及び検証を目的としている。そのために、各領域における思考様式の解明については並行的に、日本語の思考様式の追究と学習材及びカリキュラム開発・検証については段階的に進捗させていく。「教育研究・実践における思考様式の解明」では、フィールド調査と談話分析、ナラティブ・アプローチによる教師への調査を実施する。「日本語史における思考様式の解明」では、文献調査による学習材開発用の素材発掘と書記テキストの分析を行う。また「日本語独自の思考様式の解明」と「学習材・カリキュラムの開発」では、実験授業の実施・検証を行う。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果

本研究では、日本語の歴史的変遷を背景とした「国語の特質」から日本語独自の思考様式の解明を行い、学習者の思考様式の変容に迫る古典学習材とカリキュラムの開発を進めた。3年間の研究期間において、学習者が自らの言語活動について、それを支える背景とともに自覚的に捉え直すことを可能にする学習材を開発し、それに基づく教育の可能性を指摘した。

学習者が学ぶことになる言語(現代日本語)のあり方を知るためには、日本語の歴史的変遷を背景とした「国語の特質」を解明する必要がある。歴史的変遷を背景に形作られた「国語の特質」とは、諸外国語と比べた際に目に見えやすい特徴(発音・表記・文法・語彙など)のみを指すのではない。むしろ日本語話者にとって、その自明性を問うことが難しい思考のレベルにおいて学習者の言語を縛っている目に見えづらい仕組みと捉え直すことができる。

また、こうした歴史的変遷を背景とした言語の特質を設定することによって、古典教育に新たな学習内容と方向性を示すことが可能となる。現代を生きる学習者にとっての古典の世界や言語は、自身とは離れた遠いところ位置するものである。古典を学ぶためには、現代のフィルターを通した翻訳や喩えを経由せざるを得ない実態があり、学習者の現実(言語観)を変容させる力を持つ授業を可能にする学習材は決して多いとは言えない。しかし、自分自身が読み・書くこと、考えることに影響を与え、また変容させうる可能性が古典の中にあることを知る古典学習は、学習者が古典の(言語)世界を生きるプロセス(活動)が仕組まれることで成立する。本研究における「学びのプロセスと日本語書記史を統合する」学習材・カリキュラムの開発は、最終的には「読み・書く」言語活動における思考(ものの見方・考え方)の深化を目指している。その意味において、古典は「読む」ための教材から「書く」ための教材へとその位置づけを拡張させることとなる。

以下、研究各段階における主要な成果についてまとめる。

日本語書記史から構想する教育内容

日本語書記史の通時的な観点から、<日本語の音声言語と書記言語の「せめぎ合い」や「飼いは慣らし」の連続する生成過程の中に私たちは存在していて、その文化共同体に属している。>という「言葉による見方・考え方」を提案した。それをマクロレベルとすると、具体的なテキスト表現を分析し、表現に転用するために、ネーミングによる「思考様式」がミクロレベル

として想定される。さらに、その「思考様式」を抽象化して、「対比」などのメゾレベルの認識方法が想定できる。これらのミクロ・メゾレベルの〔思考力、判断力、表現力等〕が、読むことと書くことの学びの内容になり、「深い学び」へつながる道を用意する。

日本語書記史はどのように位置づけられ、教材化されているか

現行の学習指導要領や中等教育の教科書を検討した。総じて、「日本語書記史」は、学習指導要領においては重要な指導事項として挙げられているものの、歴史的・通時的観点から言葉の移り変わりを捉え直し、学習者個々の表現に生かせるものとして提示しようとしているものはきわめて少ないと言わざるを得ない。言葉は移り変わっていくものであり、時代や状況に応じた適切な表現を追求していくことが求められるが、その原理や背景を捉えることなく、時代の変化に無意識に追従していくのでは、豊かな言葉の使い手となることは困難であろう。今後は、「古典探究」の言語活動例に生かせるような、「問題意識を高め、言葉の成立や変化について課題探究型の授業を展開できるような教材」の開発が望まれる。

日本語書記史から構想する学習材の開発

<『平家物語』『敦盛の最期』『扇の的』>

諸本（高野本・延慶本）を活用し、異なる本文を読み比べることで、表現の仕方や叙述内容にかなりの相違があることに気づくことができる。活字によるテキストを唯一の形とする認識から離れ、写本・版本のテキストの存在を知ることによって、書写者の個性やその人物が生きた時代の文化の投影の読み取りが可能となる。また、現行の中学校の国語教科書においては、話し言葉と書き言葉は主として現代語領域の学習内容として位置づけられているが、『平家物語』の古写本を使用することによって、やがて古典語領域での話し言葉と書き言葉の学習にも結びつけることができると期待される。教材開発のための基礎資料として、高野本・延慶本の対照表を作成した。

<『宇治拾遺物語』『薬師寺別当』>

説話作品を出典（日本往生極楽記）とそこから派生した説話（宇治拾遺物語・今昔物語集）の流れに位置づけ、異なる同文説話本文を読み比べることで、同一内容を表す言語表現に差異が見られることが分かる。また、そうした言語の差異は、説話生成・享受の場とそこに関わる書き手の志向によって選択的に存在していることに気づくことで、現代の書き手たる学習者が、自らの言語活動（書く活動）について立ち止まり、振り返り、自覚的に行う契機として、古典を位置づけることができる。教材開発のための基礎資料として、『僧都済源（日本往生極楽記）』『薬師寺別当』（宇治拾遺物語）』『薬師寺済源僧都往生語』（今昔物語集）の対照資料を作成した。

日本語書記史から構想する授業の実践

<授業のデザイン>

日本語の特質の一つとして、歴史的背景を伴う書記の複層性や、それに密接に関連する日本語話者の思考様式（日本語話者に特有のものの方・考え方）があると考えられる。すでに完成されたものを理解し、継承していくという捉え方に対し、本授業化においては、日本語書記史の知見に基づき、言語文化の形成プロセスに注目している。言語文化を形成プロセスの途上にあるものと捉える立場である。そのためには、言語文化共同体に生きる学習者という視点から、過去の言語文化共同体の内実を解明し、現代の言語文化共同体との間を行き来する学習者を実現するための授業デザインを目指す必要がある。

<実践1『平家物語』（を受けた中学校での検証授業）>

活字・現代語訳だけによらない古典指導の在り方を模索しながら、異本の比較を通じて物語を面白くしている要素（人物像の強調や対比など）に気付かせることについて成果があった。まだ課題は残っているが、授業者自身のこれまでの古典指導と比較して、「古典を学ぶことは面白い」と感じる生徒が確実に増えていたことが実感された。

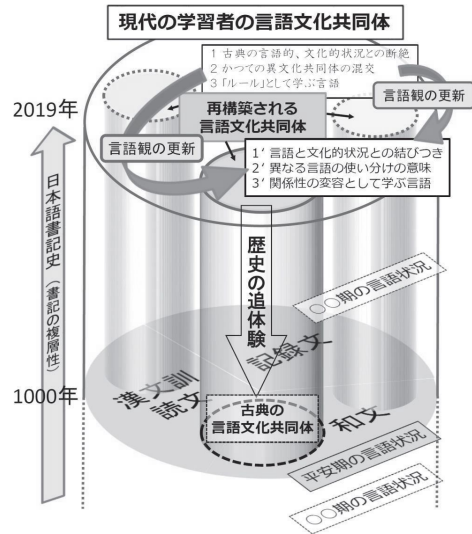
<実践2『宇治拾遺物語』（を受けた中学校での検証授業、授業の構想と授業化の視点）>

古典を教材とする授業において、学習者にとって理解が容易でないことが常にマイナスに働くわけではない。内容把握（理解）を保留して思考を進める過程で、わからなさが議論を楽しむ前へと進める機能を果たすことを明らかにした。また、日本語書記史の観点から『宇治』と『今昔』とを比較する授業において、話し言葉と書き言葉の特徴を体感的に学ぶことが可能であることを示した。さらに、それぞれの特徴を一般化へと志向する授業を構想し、その過程で『宇治』の書きぶり（語り方）を「型」と名づける活動を仕組むことで、学習者が当時の人々のものの方・考え方を獲得していくことを目指した。その結果、1年生と3年生のそれぞれの段階に応じて、楽しみながら自分たちなりの名づけを行うことができることがわかった。授業化においては、従来型の授業を超えるための教師の指導観への揺さぶりや、日本語書記史を含む多角的な教材研究が必要であることを示した。

(2)本研究の課題と展望

以上のように、本研究が構想する教育内容と学習材、また授業デザインを示し、具体的な実践によって新たな授業の可能性を示すことができた。しかし、教材開発に成功したのは、現代の学習者が向き合い得る日本語書記史のごく一部に過ぎない。今後は定番教材の新たな位置づけを検討する作業を進める一方で、教科書教材としては未開拓な学習材の開発も検討していく必要がある。その過程において、開発された学習材がどのような系統性を持ち、学習者の発達段階にどのように位置付くのかを説明するためのカリキュラムの開発と検証を進めることができると考える。

また、教育内容や授業デザインの検討からは、古典の学習方法としての古典世界の追体験を実現するためには、学習者が仮想的に行き来する言語文化共同体の解明が不可欠であるとの見解に至った。その一部をモデルとして示す。この言語文化共同体の内実の解明を「ものの見方・考え方の解明」との関連において行うことが今後の重要な課題となる。



5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 27 件)

- 田中宏幸、「課題意識・目的意識を持って書く 教科書教材の比較と活用」, 月刊国語教育研究, 第 562 号, pp.4-9, 2019、査読無し
- 田中宏幸、「書けない原因の究明と課題解決の方策」, 日本語学, 第 38 巻 3 号, pp.4-11, 2019、査読無し
- 森美智代、「自己と他者の対等性・相互性を超えた「聞くこと」の教育の目標論 レヴィナスによる問答法批判を中心に」, 福山市立大学教育学部研究紀要, 第 7 巻, pp.117-125, 2019、査読有り、http://dx.doi.org/10.15096/fcu_education.07.09
- 田中宏幸、「ことばの力を育てる国語教育 古典の学習指導の改善」, 岡山高校国語, 第 54 号, pp.9-21, 2018、査読無し
- 田中宏幸、「本の紹介 / 中学校・書くこと 意欲の喚起と表現力の向上のために」, 実践国語研究, 第 350 号, pp.46-47, 2018、査読無し
- 田中宏幸、「新学習指導要領・高等学校「国語表現」の特徴と指導のあり方 他者との多様な関わりの中で伝え合う力の育成」, 日本語学, 第 37 巻 12 号, pp.134-143, 2018、査読無し
- 鈴木恵、「国語学的手法を用いた『平家物語』の教材分析」, 新大國語, 第 40 号, pp.1-28, 2018、査読有り
- 田中宏幸、「資質・能力を育てる新しい教科教育実践 - 国語科の視点から -」, 日本教科教育学会誌, 第 40 巻 4 号, pp.79-84, 2018、査読有り
- 森美智代、「小学校での書写指導に対する教師の指導観の分析 「国語科指導法」(書写実技) 受講者の実態調査」, 福山市立大学教育学部研究紀要, 第 6 巻, pp.97-106, 2018、査読有り、http://dx.doi.org/10.15096/fcu_education.06.10
- 森美智代、「提案 3 ディシプリン重視の立場から「教科の本質」を再考する」, 国語科教育, 第 83 集, pp.12-14, 2018、査読有り、https://doi.org/10.20555/kokugoka.83.0_12
- 磯貝淳一、「前田本『三宝絵』の文体について 説話の構造と接続詞の関わりから」, 人文科学研究, 第 141 輯, pp.17-39, 2017、査読無し、<http://hdl.handle.net/10191/49473>
- 田中宏幸、「「文章化」以前の指導の重要性」, 教育科学国語教育, No.813, pp.4-7, 2017、査読無し
- 田中宏幸、「「書くこと」の授業づくり 「理の共有」と「情の共有」に配慮して」, 実践国語研究, No.345, pp.6-7, 2017、査読無し
- 松崎正浩、「「話すこと・聞くこと」の授業づくり 学習の構造的な理解と発達の見通しから」, 実践国語研究, No.345, pp.4-5, 2017、査読無し
- 森美智代・磯貝淳一、「日本語書記史を観点とする日本語話者の論理意識に関する試論：出来事に対する時系列連鎖型の認識傾向に注目して」, 国語教育思想研究, 第 14 号, pp.36-44, 2017、査読有り、<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044834>
- 森美智代、「コミュニケーションの言語化されない部分に着目した聞く力の育成」, 教育科学国語教育, No.811, pp.36-39, 2017、査読無し
- 鈴木恵、「古典教材の授業づくり 『平家物語』扇の的をめぐって」, 新潟大学教育学部研究紀要, 第 9 巻第 2 号, pp.23-35, 2017、査読無し、<http://hdl.handle.net/10191/47105>
- 鈴木恵、「古典教材の授業づくり 『平家物語』敦盛の最期をめぐって」, 新大國語, 第 39

- 号、pp.1-20、2017、査読有り
- 田中宏幸、「近代中等作文教育における修辞学の受容と実践展開」、国語教育研究、第 58 号、pp.1-21、2017、査読有り、<http://doi.org/10.15027/45371>
- 鈴木恵、「『書くこと』指導への一提言 読書感想文指導を中心に」、新潟大学教育学部研究紀要、第 9 巻第 1 号、pp.75-92、2016、査読無し、<http://hdl.handle.net/10191/44717>
- ②①森美智代・長田友紀代、「国語教育における話し合い指導の研究 視覚情報化ツールによるコミュニケーション能力の拡張」、国語科教育、第 80 集、pp.87-89、2016、査読有り、https://doi.org/10.20555/kokugoka.80.0_87
- ②藤原顕・森美智代・濱原泉、「小学校における実習等の体験活動を通じた実践知の形成：福山市立大学生を対象とした事例研究」、福山市立大学教育学部研究紀要、第 4 巻、pp.93-103、2016、査読有り、http://dx.doi.org/10.15096/fcu_education.04.10
- ②③松崎正治、「スクールリーダーになっていく教師の成長過程の研究」、同志社女子大学総合文化研究所紀要、第 33 巻、pp.105-123、2016、査読有り、<http://doi.org/10.15020/00001386>
- ②④松崎正治、「西尾実の国語教育思想における言語観 フィヒテの言語哲学を媒介として」、同志社女子大学学術年報、第 67 巻、pp.47-55、2016、査読有り、<http://doi.org/10.15020/00001449>

〔学会発表〕(計 18 件)

- 「辞書と文法」、鈴木恵、中越国語教材を読む会、2019 年 2 月 23 日、アトリウム長岡（新潟県）
- 「魯迅『故郷』の新たな授業づくりの方法と実践」、鈴木恵・元井啓介・三村孝志・角谷聰、新潟大学教育学部国語国文学会、2018 年 7 月 28 日、新潟大学（新潟県）
- 「日本語書記史からみた『宇治拾遺物語』の授業化の視点」、森美智代・磯貝淳一・松崎正治・田中宏幸・鈴木恵、全国大学国語教育学会、2018 年 5 月 26 日、大阪教育大学（大阪府）
- 「漢字文の日本語書記史 所謂『助字』と日本語との対応を軸に」、磯貝淳一、新潟大学言語研究会、2018 年 5 月 17 日、新潟大学（新潟県）
- 「『古典の教材化』の可能性について 説話の文章を例に」、磯貝淳一、中越国語教材を読む会、2018 年 2 月 17 日、アトリウム長岡（新潟県）
- 「『平家物語』の新たな授業づくりの方法と実践」、鈴木恵・元井啓介・武井正明、新潟大学教育学部国語国文学会、2017 年 7 月 22 日、新潟大学（新潟県）
- 「日本語書記史からみた『宇治拾遺物語』の教材的価値 - 学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材の開発」、磯貝淳一・森美智代・鈴木恵・田中宏幸・松崎正治、全国大学国語教育学会、2017 年 11 月 4 日、福山市立大学（広島県）
- 「コンピテンシーと国語科教育 ディシプリン重視の立場から『教科の本質』を再考する」、森美智代、全国大学国語教育学会、2017 年 11 月 4 日、福山市立大学（広島県）
- 「資質・能力を育てる新しい教科教育実践 - 国語科の視点から -」、田中宏幸、日本教科教育学会、2017 年 9 月 9 日、北海道教育大学（北海道）
- 「『聞くこと』の教育における能動性と受動性に関する考察」、森美智代、全国大学国語教育学会、2017 年 5 月 27 日、岩手大学（岩手県）
- 「アクティブラーニングの評価のフロンティア～プロセスの評価とプロダクトの評価」、河合道雄・杉山芳生・松崎正治、大学教育研究フォーラム、2017 年 3 月 20 日、京都大学高等教育研究開発推進センター（京都府）
- 「古典教材の授業づくり 『平家物語』敦盛の最期をめぐって」、鈴木恵、中越国語教材を読む会、2017 年 2 月 2 日、アトリウム長岡（新潟県）
- 「和化漢文の特質からみた『書記』について」、磯貝淳一、新潟大学教育学部国語国文学会、2017 年 2 月 2 日、新潟大学（新潟県）
- 「虚構世界との往還に着目した保幼小連携のための一考察」、森美智代、初等教育カリキュラム学会、2017 年 1 月 8 日、広島大学（広島県）
- 「コンピテンシーと国語科の本質 国語教育史の視点から」、松崎正治、日本教育方法学会、2016 年 10 月 1 日、九州大学（福岡県）
- 「近代中等作文教育における修辞学の受容と実践展開」、田中宏幸、広島大学教育学部国語教育学会、2016 年 8 月 11 日、広島大学（広島県）
- 「複数世界の多様性を学ぶ文学教育の考察」、森美智代、全国大学国語教育学会、2016 年 5 月 28 日、新潟大学（新潟県）

〔図書〕(計 9 件)

- 大滝一登編『高校国語・新学習指導要領をふまえた授業づくり・実践編 / 資質・能力を育成する 14 事例』、田中宏幸（共著）、明治書院、pp.170-173・pp.188-189・pp.198-199、2019
- グループ・ディダクティカ編『深い学びを紡ぎ出す～教科と子どもの視点から』、松崎正治（共著）、勁草出版、pp.26-43、2019、全 271 頁
- 浜本純逸監修『<ことばの授業づくりハンドブック> 小学校「物語づくり」学習の指導』、松崎正治（共著）、溪水社、「作品理解から諸能力を育てるための「物語づくり」へ 変身作文・視点・書き換え・思考往還」pp.123-140、2019、全 220 頁

田近洵一他編『国語教育指導用語辞典〔第五版〕』、田中宏幸（共著）教育出版、pp.126-127、2018、全 399 頁
田近洵一他編『国語教育指導用語辞典〔第五版〕』、松崎正治（共著）教育出版、pp.302-303、2018、全 399 頁
森美智代・難波博孝編『1 日 10 分言語力ドリル入門 聞く・話す』、第一学習社、2018、全 32 頁
日本文学会安田文芸論叢編集委員会編『安田文芸論叢』第 3 輯、田中宏幸（共著）安田女子大学、「主体的・対話的で深い学び」を促す高等学校国語科の授業展開」、pp.193-223、2018、全 265 頁
全国大学国語教育学会編『国語科教育における理論と実践の統合』、田中宏幸（共著）東洋館出版、「国語科教育における理論と実践の統合～養成教育のあり方～」、pp.48-53、2018、全 82 頁
日本教育方法学会編『学習指導要領の改定に関する教育方法学的検討～「資質・能力」と「教科の本質」をめぐる』、松崎正治（共著）図書文化、「資質・能力」の形成と「教科の本質」：国語」、pp.49-60、2017、全 167 頁

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：田中 宏幸

ローマ字氏名：TANAKA Hiroyuki

所属研究機関名：安田女子大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：40278966

研究分担者氏名：松崎 正治

ローマ字氏名：MATSUZAKI Masaharu

所属研究機関名：同志社女子大学

部局名：現代社会学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：20219421

研究分担者氏名：磯貝 淳一

ローマ字氏名：ISOGAI Junichi

所属研究機関名：新潟大学

部局名：人文社会科学系

職名：准教授

研究者番号（8桁）：40390257

研究分担者氏名：森 美智代

ローマ字氏名：MORI Michiyo

所属研究機関名：福山市立大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00369779

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。